

---

# ユース！

陽向暖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユース！

### 【Nコード】

N1412D

### 【作者名】

陽向暖

### 【あらすじ】

部屋がないっ！？はるばるやってきた東京は、初っ端から最悪だった。マンションの契約ができていなかったのだ。そんな朱李の行きつく先は、同居人を探すというもの。しかしネットで出会った“ユウ”とは、実は男で…！？2007年度コバルトノベル大賞選外作品。

## 起

「部屋がない!?」

憧れの上京、そして一人暮らしを目前とした矢先の出来事に、玖瀬朱李は思わず声を上げた。不動産屋の店員が困ったように手をこする。

「ええと、玖瀬様には期日までに連帯保証人の確認と仲介料がお支払いだけなかつたので、お電話を差し上げたはずなのですが……」

「そんなの……あたし貰ってません!」

「そう申されましたも。申し訳ございません。今担当が外しておりますので、詳しい事はまた」

「またなんて言われても困ります! あたしっ、今日からそこで住むつもりだったし……部屋っ、他に部屋ないんですか? 仲介料なら今払いますし、保証人もすぐになんとかしますから!」

今にもカウスターを越えんばかりとする朱李の気迫に、店員は押されつつも眉をしかめた。

「……申し訳ございません。お客様の希望されたマンションは既に空き部屋がありませんので……」

「じゃあ、他の部屋で! 今すぐ住めて、家賃七万五千円までの部屋なら、この際どんなのでも構いませんから!」

「そんなお部屋はありません!」

半ば強引に店から追い出され、朱李は途方に暮れた。

スタートからいきなりこんな事になるなんて、この一人暮らしは幸先が悪そうだ。

大体、どうしてこんな事に? 契約書はちゃんと母に渡した。保証人欄のサインも、契約金が五万円なのも、ちゃんと伝えたはずだ。そうだ。あたしちゃんとやったじゃん!

とぼとぼと沈んだ面持ちで歩いていたら朱李はふと気付いたように

携帯を取り出した。

「あ、もしもしお母さん？ マンションの契約書と仲介金払われてなかったんだけど！」

『へえ？』

電話口に出た母は、気の無い返事をしてきた。まるで他人事だ。

「へえって！ なんで振り込んだいてくれなかったの？」

『なんでお母さんがあんたのマンションのお金面倒見なきゃいけないの』

「なんでって……」

『美容師になるには東京で勉強しなきゃいけないんだって、親の反対押し切って出て行ったのは誰？ 学費も全部自分で何とかするって、あんた言ったんでしようが』

「それは……」

それは確かに事実だった。長野県に実家のある朱李は、どうしても東京で勉強したい、東京で美容師になるからと、啖呵をきって上京してきたのだ。

それでも、住むところのお金くらい見てくれたっていいではないか。正直、どれだけバイトをしても学生の朱李では学費と生活費でいっぱいいっぱいなのだ。

『だからお母さん契約書にサインだけして待ってたのに、あんた全然取りに来ないし、しまいにや不動産屋から電話かかってくるから“好きに解釈してください”って言ったのよ？』

その言葉に、朱李はあんぐりと口を開いて佇むしかなかった。なんと。電話を取っていたのは朱李ではなく母だったのだ。

「な……なんでそんなこと言うの……！」

と嘆いたところで何もならない。部屋は既に他の人に貸されていたし、代わりに住める部屋も無いのだ。

\*\*\*

胸を高鳴らせながら上京してきたのに、今の朱李の気分は最悪だ。それでも何とか今日の寢床を確保しなければならぬ。

ホテルに泊まるお金なんて持ち合わせていない朱李が頼れるのは、一人しかいなかった。

「……と、言うわけで、今日泊めてください」

突然押しかけてきた友人の、あまりに間抜けな言葉に、やまもとゆか山元結架は呆れるしかなかった。

結架は朱李と同じで長野県から上京してきた十八歳だ。とはいっても朱李と違い、通うのは看護学校なのだ。

「いいけど、どうすんの？ 家賃七万の駅ちかマンションなんて、きつともうないよ」

「それは……うん。でもどうせ七万五千円なんて出せなかったし」

「だいたい、朱李は抜けすぎなのよ。啖呵きつて家出たんだから、お金の面倒なんて見てもらえるわけないじゃん」

腕を組んで溜息混じりにはかれる結架の言葉を、朱李は正座しながら受け止めることしかできなかった。……ごもつとも。

だけど、何があるかと親は親だ。結局は面倒見てくれるのではと甘い気持ちになることもあるだろう。それを結架に言えば、「甘い！」とはつきり言われてしまうのだろう。

「とりあえず住めそうなマンション探そうよ。うちだってそんなに長くは泊められないし」

結架は、元々東京に住んでいる伯父の家に同居している。結架ではなく伯父の持ち物であるその家に、朱李も長居する気はなかった。そういうわけで、結架が開いたパソコンを後ろから覗き込む。

いつの間に覚えたのか、結架はブラインド・タッチで自在にパソコンを操っていた。

「朱李、なんか住む家に条件ある？」

朱李と結架は三年来の親友だ。そんな風に訊ねられれば、遠慮もなしに朱李は答えていった。

「えつとねー。部屋は八畳以上あって、1LDKで……、駅ちか

はもう諦めるとしても日当たりいいのは絶対でしょ？ 5階あたりに部屋があればいいなあ。それから……」

「朱李！」

どちらかといえば高音声のはずの結架が突然低く叫ぶので何かと思えば、睨むようにこちらを見ていた。

「……結架ちゃん？」

「あなた……本当に探す気ある？」

「も、もちろん」

「だったらそんな条件のめるわけ無いってことくらい気付きなさいよ！」

怒り絶頂の結架に朱李は肩を竦めた。どうやら調子に乗りすぎたらしい。

しおらしく身を縮めて上目遣いをしてくる朱李に、結架は溜息をついた。身長が低く体の細い朱李は、同性の結架から見てもかわいいため、その動作は怒る気も失せる。何より、その行動が天然的なものだから性質タチが悪い。

「ああもう、そんな好条件の部屋に住みたいなら、同居でもした方がいいんじゃないの？」

別にその言葉に大した意味など無かったのだろうが、朱李は案外それを本気にとった。

「同居……？ そっか、その手があつたんだ！」

「は？」

「そうだよね。同居なら家賃も半分だし、もしかしたら食費とかも安くなるかもしれないもんね！ 結架ちゃん天才！」

そんな満面の笑みで言われても……。と、結架はなんだか複雑な気持ちだった。

しかし反対する理由も無い。こんな無邪気な笑顔を向けられたら、なんだか協力してやろうとも思えるものだ。パソコンに向き直ると、結架は同居人募集の記事を検索してやった。

意外と同居人募集の書き込みは多く、朱李は目移りしている。い

つしかパソコンに面と向かっているのは、結架でなく朱李になっていた。

「あ、結架ちゃんこの人よくない？ ほら、あたしの専門に近いよ」

「あんた、それ男の人じゃん」

「駄目かなあ」

「最初<sup>ハナ</sup>っから候補に入れるまでも無いでしょ！ 言つとくけど、女との同居を喜んでOKする男なんてろくなのいないよ。みーんな下心ありありなんだから」

結架に後ろから反対されれば、朱李は口を尖らせつつもスレッドを閉じた。他のスレッドを開く。そんな繰り返し、四、五回続いた。

「あ！ この人いい！ 駅まで五分の家賃十二万円だって。2LDKで……って……。あたしの条件ピッタリじゃん」

“ユウ”というスレッド主の書き込み、朱李は妙に心惹かれた。条件がピッタリなことだけが、この胸の高鳴りの理由だとは思えない。

「けど、性別未公開って……怪しくない？」

確かにユウの性別欄は未記入になっている。自分の性別すら明かさない人間を、結架が不信に思うのもおかしくはないだろう。

しかし、朱李にそんな危機感はなかった。

「だーいじょうぶだよ！ ユウって明らかに女の子の使う名前じゃん。うん、決めた。あたしユウちゃんと同居する！ ねえ、これどうやって申し込めばいいの？」

屈託のない笑顔は、本当に大丈夫なんじゃ。と思わせるから不思議だ。とりあえず結架は、渋々ながらもユウにメールを送ってやった。

相手も急いでいたのか、メールと一緒に書き込んだ朱李の携帯電話に返信が来るのは早かった。期待感いっぱい、朱李は受信したメールを開く。

《メールありがとう！ ユウです。是非同居の話、進めさせてくだ

さい》

朱李もすぐに返信をする。

《はい！ 不束者ではありますが、よろしくです》

《あの、迷惑でなければ、近々お会いして話しませんか？》

《いいですよー》

《じゃあ明日は？》

《いいですよ》

《じゃあマンションの隣にカフェがあるので、八時にそこで待って  
ます》

そこで朱李は携帯を閉じた。結架の痛いほどの視線が背中に突き  
刺さる。

「明日会うことになったよ」

「もし男だったら断りなさいよ」

「でもいい人そうだし……」

「あのねえ！」

「とにかく会ってからだよ。どうするかも、それから決める」

一度言い出したら朱李は是が非でも言葉を覆さない。まあ、常識  
はある程度あるのだから、そんなに親身に止めなくても大丈夫か。  
そう思つて、結架は翌日、黙つて見送る事にした。

\*\*\*

八時十分前。少し着くのが早かったかな、とも思い、朱李はユウ  
にメールを入れることにした。送信ボタンを押して二分経つや否や、  
すぐに返信が返ってくる。

《こっちももう着いてるよ。奥の窓側の席に座ってる》

瞬間、朱李の表情がパツと華やいだ。ずっと心惹かれていた書き  
込み、そして書き込み主。その人物に漸く会えるのだ。

すぐにカフェに足を踏み入れれば、朱李は店の奥に急いだ。ユウ  
ちゃんに会える。どんな子だろう。きつと明るくて優しく、すて

きな人なんだろうな。と、そんな期待が胸でどんどん膨らんでいった。

しかし奥へと進むうちに、朱李の表情は険しくなっていく。奥にあるのは二人掛けの丸いテーブルが三つ。しかしそこに、朱李の思い描いた“ユウ”の姿はなかった。

向かって右側の席にはカッブルらしき男女。真ん中にはモーニングを楽しむようなスーツ姿のサラリーマン。そして左側の席には、元はストリートなのだろう茶色の髪の毛先を、弄ぶようにはねさせた青年だ。

メール見間違えたのかな。それともカフェってこのことじゃなかったのかな。そんな不安に駆られて、朱李がもう一度携帯電話を開きかけた時。

「玖瀬さん？」

突如掛けられた声にギョツとした。だって声を掛けたのは、左側の席に座っていたあの青年だ。

「はい……」

「よかった、合ってた。あ、俺がユウです。本名は麻木遊斗あやきのゆうたっています」

そう言っただけで笑った顔にはえくぼが出来ていた。かわいい。そう思うのは、彼に失礼だろうか。

驚いたことは事実だけど、彼がユウだと言われれば朱李には納得がいった。この感じは、確かにあの書き込みを開いた時の、不思議な心惹かれる思いと一致する。

遊斗に招かれれば、朱李はまた大きくなる期待感に心を急かされつつ、彼に従って向かいに座った。

「ええつと、まず驚いたよね。メール見た限り、俺のこと女だと思ってたでしょ」

注文したコーヒーが届く頃、遊斗はまずそのことについて謝罪した。騙している意識はあつたらしい。

「それは、まあ……。友達にも怪しいとは言われてましたけど」

「はは……。あの、嫌になっただかな？ 同居」

嫌かどうかと聞かれれば、正直断ろうとは思えなかった。友達、もしかしたら、遊斗は朱李にとつてそれ以上の存在になってくれるような気が、ずっとしているのだから。

ただ気がかりなのは結架だ。あれだけ男との同居は反対していた結架。彼氏はおるか、男友達もまともにいたことのない朱李には、結架の言う事も聞かないというわけにはいかなかった。

「一応、すぐにうんとは言えない……。かも」

朱李が答えに渋ると、そこを狙ったかのように遊斗は手を合わせてきた。

「そこをなんとか！ 本当は彼女と同棲しようと思つて借りた部屋なんだけどさ。実は、さあ引つ越そう、って時に振られちゃって……。もう引つ越す金もないし、だからつて一人で住んでくには家賃がさ。これでも結構同居人の話くんの待つてたんだぜ？ 部屋は二つあるし鍵も閉まる。いろいろ協力してやってこうよ！」

なっ！ つと加えられそうな勢いの遊斗に、朱李は正直迷つていた。朱李だつて、こんなチャンスはもう二度とめぐつてこないかもしれないのだ。

話によれば、性別を書き込まなかったのも、あまりにそれを意識して申し込んでくる人間がいなかったかららしい。

「他に不安あるなら、俺何でもするよ？」

「……何でも？」

朱李が怪訝そうに聞き返すと、遊斗はもういいってほどに頷いた。いや、まだ頷いている。

「料理も、洗濯も？」

「は？」

「掃除も？ 新聞の勧誘断るのも？」

「ちよ、ちよつと……」

「テレビのチャンネル権も譲ってくれるの？」

「それはジャンケンだろ！」

そんなたあいもない言い合いに、どちらからともなく笑いが漏れた。

ほら、やっぱり。初対面からこんなに心許して話せる人なんて、貴重。

「うん、いいよ。同居しようよ。どっちにたいしても、悪い話じゃないんだから」

「……マジで、いいの？」

あんなに有無を言わせぬ気迫で迫ってきたくせに、朱李が頷くと遊斗は動揺したようだった。でもそうなる気持ち、なんだか朱李には分かる。

「うん」

「じゃあ……、改めて？ よろしく、朱李ちゃん」

そう言っつて遊斗は右手を差し出した。答えるように朱李も右手を差し出し、しっかりと握り合う。

「うん。よろしく。……えと、ゆーとくん？」

「遊斗でいいよ。なんかあんたとは長い付き合いになりそうだし」  
恐らく遊斗は、こんな言葉に深い意味など込めていなかったのだろう。だけど朱李は、相手も自分と同じことを考えていたと言う事に、改めて遊斗の貴重さを感じていた。

「じゃあ、あたしも朱李でいいよ。せせこましいの苦手だし。あたしも」

「了解」

最初の時のようにえくぼをつくって、遊斗は笑った。その笑顔は、朱李もつられて笑顔にする。

「なんか、ゆーとの笑った顔かわいいね」

先程は失礼かなと思言えなかった言葉が、今度は無意識に口をついて出た。あ、と口を押さえる頃には、遊斗の目がまん丸になっている。

「男にかわいいは、嬉しくないよ」

そんなこと言うくせに、顔は相変わらず笑んでいた。

「でも、それ以外はかつこいいよ？」

ふと出た言葉。それに、遊斗は吹き出すように笑った。どうやらつぼにはまったらしい。

もちろん遊斗だって、これが朱李以外の人間の言葉なら愛想笑いで済ませたはずだ。失態を取り繕う為のお世辞はいらぬ。ただ、おそらく朱李は本音だ。そう思えば、遊斗は笑いをこらえる事など出来なかった。

しかし、朱李は思う。本当に遊斗はかつこいいのだ。ぱつちりと開いた二重瞼の丸い双眸は、一重で狐目の自分とは相反しているし、男の子らしいガツチリとした体も、痩せすぎだと言われるほど、女の子らしい丸みのない体型の朱李からしてみれば理想だ。

交際とも言えない交際をした男の子は数人いるけれども、遊斗ほどかつこいい青少年ではなかった。きっと遊斗は、いや、間違いないもてるだろう。

そんな風に考えている間にも、遊斗は笑い続けていた。そうやって腹を抱えるほどに笑われると、正直朱李もバツが悪い。

「ゆーと？ いい加減にしてよね」

「ああ、悪い。でもいいな、朱李といると退屈しない」

「そんなこと言って、そのうち新しい彼女できたとか言って、家に連れ込んで見せ付けないでね？」

「見せ付けねー、てか、思い出さすなよ。これでも結構凹んでんだからさ」

「あ、ごめん」

「いいけど」

何の気なさそうにコーヒーを飲みきれば、遊斗は伝票を持って席を立った。

こうして、朱李と遊斗の同居生活が始まる事になるのだった……。

## 承

遊斗ゆうととの同居生活が始まってからいろいろな行事が重なって、結架ゆけに詳しい報告ができたのは、二週間も経ってからだった。

今日は結架の学校の授業開始が午後だということ、買物ついでに朱李あかりの学校の近くまで来た彼女と、カフェで昼食をとっている。

「……………」

「だから、ね。報告は遅れちゃったけど、あたし麻木遊斗まきゆうとって人と同居することになったから……………」

「それをあたしが、そうなんだ。よかったね、って、笑顔で喜ぶんでも思ってたんの?」

「思ってたない、です」

朱李は手をもじもじとこすり合わせた。でも遊斗との間に、結架が心配するようなことは何一つない。

「でも、ゆうとは本当にいい人だよ。結架ちゃんが心配する事はないうって」

「そーいうこと言ってるんじゃないの! 例えばその麻木遊斗? がいい人だとするわ。それも文句のつけようがないくらいね。でも、そいつ彼女と暮らすつもりで部屋借りてたんでしょ? もしその彼女が戻って来たらどうすんのよ、朱李?」

「……………どうも、しないけど」

「だーから! 彼女がそこで暮らすって話になるでしょうが!」

核心的な結架の言葉に、朱李は飲んでいたミルクを噴出しそうになった。

彼女があの家で暮らす事に? そしたら必然的にオジヤママシな朱李は家を出る事になる。そうならまた、元の状態に逆戻りだ。黙りこんだ朱李に、結架はほれ見たことかと腕を組んで鼻を鳴らした。

「分かった? 男なんてそんなもんなのよ。彼氏じゃないんだから、

きつとすぐ切り捨てられるわよ？ 男と女の価値観は全然違うの。男女の友情なんて、これほど当てにならないものはないわ」

朱李は口を尖らせた。遊斗のこと何も知らないのに、ここまで言われたらそろそろ彼がかわいそうだ。

確かに男と女の価値観は違う。朱李の過去の恋愛は、正しく価値観の違いによる自然消滅だった。会わない＝別れた。女はそんなつもり全くないのに、男はそう思いがちらしいのだ。でも。

「ゆーとは、そんな人じゃないと思う」

「わっかんないでしょ。あんまり期待とかしないほうがいいと思うけど」

期待とか、そんなものじゃないのだ。もう。

「ゆーとはそんな人じゃないよ」

顔を上げた結架は不服そうだった。正直、朱李に言い切られると結架は逆らえない。

「ゆーとはさ、多分あたしに似てるんだよ。だから分かるんだ。いい人で、あたしが気兼ねなく接する事ができる、貴重な存在。ゆーとはいい人だよ。結架ちゃんも会ってみれば分かるよ」

「……だから、同居なんて嫌だったのよ。あたしは……」

「え？」

脹れっ面で結架は紅茶を飲んだ。今までは、あたしが朱李の一番だったのに。そんなことが思えて仕方ない。

朱李は結架の憧れだった。だから一緒に上京できるのは嬉しかったし、一生の友達でいられるのも嬉しかった。そんな朱李が同居すると言い出したときから、結架はそんな気がしていたのだ。

朱李が自分から離れていく……。

「そうやって、遊斗くんとはかり仲良くなっていくんでしょ」

「結架ちゃん？ ゆーととはっかかりって……あたしが一番仲いいのは結架ちゃんじゃん」

そんな風に言われれば、結架は目を見開いた。この子はなんで……。

「朱李はさあ、ずるいよね」

「へっ？」

無意識に、一番欲しい言葉をくれる。高校時代から、朱李を嫌う人間はいなかった。ひねくれ者が羨望心せんぼうしんから嫌いだということはあったが、基本的に誰も朱李を嫌いにはなれないのだ。

顔がかわいくないと、朱李はコンプレックスを感じているようだが、そんなものがなくても、彼女は十分もてていた。

それでも朱李に彼氏と言う彼氏がいなかったのは、彼女が本気で恋人を作る気がなかったからだ。

と、朱李が突然声を上げる。

「あ、ごめん。あたし先輩に呼ばれてるんだ！」

「は？ もう先輩と仲良くなったの」

「うん」

「いいなあ、あたしなんか友達もいないのに、五月入ったらすぐ合宿だよ……」

溜息をつく結架に苦笑しながらも、携帯電話の示す時刻に慌てて席を立った。

「あたしでいいならいつでも愚痴聞かからさ。またね、結架ちゃん」  
千円札を机に、朱李はそそくさと店を後にした。

\*\*\*

「橘先輩！」

理容美容専門学校。朱李がここに入学して、今日で丁度十日だ。まだ右も左も分からないヒョッコだが、目の前の橘入鹿先輩たちほゆるかが、今の朱李の親鳥代わりである。

初めてその名を聞いた時は、さすがに朱李も聞き違いかと思ったが、母親のイル力好きと、父親の歴史好きの賜物なのだと、彼は苦笑しながら教えてくれた。

しかし今は名前なんて気にならないくらい、彼は朱李の憧れの存

在だ。そんな入鹿が、毎年二年生が一年生からモデルを選び、その子の恰好からメイクまでを行い披露するファッションショー、そのモデルを、朱李に依頼してきたのだ。

学校の食堂でアイスクリームを頬張りながら、朱李は疑問を投げつけていった。

「でも、モデルの決定って五月の終わりから六月じゃないんですか？　こんなに早くにあたしに決めちゃって、もっとかわいい子はたくさんいるのに」

「うん。でも俺にはもう大体のイメージがあるんだよね。玖瀬さん、それにピッタリなんだ」

「イメージって？」

「子供から大人になる瞬間の、微妙な女心。思春期って言うのかな？　そういう女の子が着る服とメイク。あと髪も」

「あたし、もうすぐ十九ですよ？」

「うんでも、玖瀬さん小さいし、細いし」

確かに、見る人が見れば朱李はまだ中学生に見えるだろう。身長は百五十三センチしかなく、体重にいたってはその四分の一ほどしかない。

朱李には一応、それがコンプレックスの一つだった。

「ああでも、そんな言われ方は嫌かな。玖瀬さんには」

「え？　いいえ。あたし、先輩の言葉は別に腹立たないですから」

「……そうなんだ」

しばしきよとんとしてから、入鹿は笑った。それが何故なのか分からなくて、朱李は同じくきよとんとする。

「じゃあ、やってもらえるのかな」

「はい！　そのかわり、あとでやめたはナシですよ」

「わかりました」

そう言って優しく微笑む入鹿を見れば、朱李にも笑みが移った。あ、いいなって、ふと思う。

橘先輩が彼氏だったら、きっと幸せなんだろうなあ。

入学初日、小さな校内で不覚にも迷ってしまった朱李を助けてくれたのが入鹿だった。以来朱李は事あるごとに入鹿を頼っていたが、そんな彼からの初めての頼み事だ。

朱李がこれを断る理由などなかった。

「午後の授業が始まるね。一年生はいろいろと大変だろうけど、がんばってね」

一度腕時計に目をやってから、入鹿は立ち上がった。

ハイと答えて、朱李もアイスの棒を片手に立ち上がる。

「先輩だって、がんばってくださいよ。卒業かかっているんですから」  
「うん」

弾くように頷いて、入鹿はまた笑った。

\*\*\*

それにしても、本当に専門学校はお金がかかる。あれから朱李は、母に何度も手紙と電話とメールで頼み込み、何とかいくらかの生活費の仕送りを得たものの、まだまだ生活していくにはゆとりがなかった。

一応喫茶店のバイトは始めているが、給料日まではまだあるし、もらった後も生活に余裕は出来ないだろう。他にもバイト探さないと、と嘆息を漏らしたとき、鞆の中で携帯が鳴った。

「もしもし？」

瞬間的に見た着信表示は結架だった。

『朱李？ 学校終わった？』

「うん。丁度今さっき。何？」

『……今から行くから』

そう言われたものの、朱李には理解するまで時間が掛かった。行くって、何処に？

「学校？ 今からここ来るの？ でも結架ちゃんの学校からじゃ家過ぎちゃうじゃん。あたしが結架ちゃんところ行くよ」

朱李から結架の家なら、電車の通り道だ。効率的に考えれば、その方がいいと思えた。

『違つて。朱李ん家』

「ええ！」

思いがけない言葉に、朱李は道端にも関わらず声を荒げた。辺りの視線が一気に自分に集中する。しかしそれに、彼女が気付いた節はなかった。

「来るって、いや、別にいいんだけどさ。急じゃない？」

『同居人見ときたいもん。今日丁度伯父さん出張でいないし』

そういう問題ではない。結架の都合は今日がいいのかもしれないが、朱李の都合は今日がいいとは限らないではないか。しかし生憎、今日の朱李に重要な用事などはなかった。

「ゆーと、今日バイトかもしれないよ」

『待つし。明日あたしの学校休みだから、何時でもいいよ。じゃあもう十分くらいで着くから。マンションの前で待つてる』

自分の用件をさっさと言うと結架の電話は切れてしまった。

十分くらいで着くって……。朱李は電車の時間によっては後三十分帰れないというのに。本当結架は、頭がいいのか悪いのか分からない。

とりあえず、春と言えどまだ四月。こんな寒い中結架をいつまでも待たせるわけにはいかないと、朱李は急いで駅へと向かった。

タイミングがよかった。駅へ行けば電車は調度着いたところで、二駅先の自宅までは最短時間に帰ることが出来た。改札を抜け、半ば駆け足になってマンションへ向かうと、玄関先に人影が見える。

「結架ちゃん！」

小走りに家へと帰ってきた朱李の体はだいぶ温まっていたが、結架はやはり寒そうだった。無意識にか、手をこすり合わせている。

「ごめん。だいぶ待った？」

「うつん。十分くらい。それでも寒かったけど」

結架は髪を上げておだんごを作っているから余計だろう。首を縮めて寒さに耐えているようだった。

「先に中入ってもよかったのに。それともやっぱ、ゆうといなかっただ？」

部屋番号は昼間遊斗のことを話したときに言っておいていた。

いつ結架が訊ねてもいいようにと行った配慮だが、それでも今日結架の突然の言葉に驚いたのは、彼女に限ってそれはないと思っただからだ。遅くとも一日前には訪ねることを予告するのが、朱李の知っている結架だった。

しかし結架は、そうではないと首を横に振る。

「だって、その遊斗って人とあたしは面識ないもの。突然朱李がないのに訪ねて来る友達なんて、怪しいでしょう」

「そう？」

もし朱李なら、なんの迷いもなく家に上げてしまいそうだ。そんな彼女の心境を読取れば、これだから朱李は危なっかしいのだと、結架はただ呆れた。

そうこうしているうちに朱李は扉を開けエレベーターに乗る。結架も次いで乗ったのを確認すると、七階のボタンを押してドアを閉めた。

「でも、確かにいいところね。駅も近いし、エレベーターあるし。これで家賃十二万は安いかも」

「だよ。彼女と住むつもりだった家だけあって、部屋から見える景色もいいし、七階とかベストポジションじゃん！ ゆーとってゼンズいいよねー」

途端に結架は口を噤んだ。どうやら遊斗の話はしたくないらしい。沈黙に耐えかねると、朱李はおもむろに口を開いた。

「……結架ちゃん、今彼氏いないんだよね」

「うん？ 何で……って、あんたまさか遊斗って奴の事……！？」

「ちが……。あたしとゆうとはそんなじゃないよ」

あまりにも結架が至近距離まで詰め寄ってくるものだから、朱李はのけぞるように体を反らした。行き着く先は壁だ。

そこでエレベーターが着いてくれたのは幸いだった。結架の脇をすり抜けて、朱李はそこからさっさと降りる。

「ほら結架ちゃん。はやく行こう。ここ寒いし！」

結架の目はまだ朱李を疑っていた。ああ、選ぶ話題を間違えたと、朱李はほとほと後悔した。

エレベーターを降りてから三つドアを過ぎたところに朱李と遊斗の部屋があった。『麻木・玖瀬』と書かれたプレートがドアにつけられている。

朱李がゆっくりとした手つきでドアノブに触れ右に回せば、それはガチャリと音をたてて開いた。遊斗はもう帰っているらしい。

「結架ちゃん、ゆーと帰ってるみたいだよ。よかった。」

言葉が途中で途切れたのは、玄関からすぐに見えるダイニングに、見知らぬ青年の姿があったからだ。テレビを持っていない朱李のために、遊斗がダイニングに移してくれたそれを、二人は見ていた。

ふと、遊斗が朱李に気付く。

「あ、お帰りー」

「ただいま……。友達？」

「ああ……。ってそっちなも？」

朱李は頷いて結架を招いた。その際にあの青年のものだろう見知らぬ靴が目につく。つま先が外に向けられ、きちんとそろえて置かれた靴。きっと彼は几帳面なのだろう。どちらかといえば面倒くさがりな性格の遊斗に、そんな友達がいるのは意外だった。

遊斗たちの近くまで行くと、ずっと後ろについていた結架が朱李の隣に並んだ。品定めするように遊斗を見ている。

「あ、えと、彼女は山元結架ちゃん。あたしの高校時代からの友達」

「……。初めまして」

そう遊斗に対して言った時も、結架の瞳は優しくはなかった。遊斗の表情が引き攣る。

「うん？ …… あ、こいつ。こいつは吉原智久。こいつも俺の高校時代からのダチなんだ。今日は、どうしても朱李が見たいって」

「そうなの？ はじめまして。玖瀬朱李です」

遊斗が親指で差す智久に、朱李は愛想よく挨拶をした。

しかし智久は返事をするどころか、ちらりと朱李を見ただけでそれ以上目も合わさない。

「とーも」

渋るように遊斗が声を掛ける。それに対しても、智久は答えなかった。

「あ、と、とりあえず、結架ちゃんも座って。せつかくみんなで会えたんだから、楽しくね」

そう言っただけで結架を床におさめると朱李も空いたところに腰かけた。そして全てしてしまっただけから気付く。

まずった。これじゃあ結架ちゃんがゆーとの前で、あたしが智久くんの前じゃん。

よりもよつて一番気まずい配置だ。一時も逸らさず睨んでくる結架に、遊斗ももう苦笑しかできないでいる。

「えーと、結架、ちゃん？ 俺の顔になんかついてる？」

「いいえ」

「……」

会話終了。駄目だこりゃ。と、遊斗が朱李の腕をつかんで自分に引き寄せた。

「何で俺ずつと睨まれてんの？」

小声で疑問を投げつけてくる。その言葉の裏には、「何でこんな子連れてきたの？」という悪態も含まれているようだった。

「ゆーとを一回見ときたいって。なんか、戸惑いもなく女の子と同じ居る奴ってことで怪しんでるみたい」

「……智と同じタイプか」

面倒くさそうにそう言っただけで、遊斗は朱李を解放した。この行為に、結架の視線がますます険しいものになっている。

高一から仲のよかった朱李は、もう結架の性格を熟知している。彼女は一度疑ったらなかなか納得しない。そう。とにかく疑り深いのだ。

と。不意に遊斗が立ち上がった。

「朱李晩飯まだだよな？」

「え？ うん」

「結架ちゃんは？」

「……まだです」

「じゃあうちで食べていきなよ。俺らも何も食べてないし。じゃあ朱李、四人じゃ食材も足りないだろ？ 俺買ってくるから。カレーでいいよな」

気持ち悪いほどの清々しい笑顔に、朱李はすぐに遊斗の考えを読んだ。ゆーとめ、この居心地の悪い空気からさっさと逃げる気だな。

「じゃ、あたしも」

「あたしも行きます」

そうはさせまいと発した朱李の声を、結架が遮った。突然の申し出に、遊斗があからさまに嫌そうな顔をする。

「いや、結架ちゃんお客さんだし……」

「いいんです。行きます」

引く気のない結架の言葉と声に、遊斗は渋々了承した。これなら朱李と出かけた方がいいと、家を出る間に合った視線が語っている。

そんな遊斗には自業自得と肩を竦めてやった朱李だが、彼女自身にも難題は残っていた。二人が帰ってくるまでの数十分間、どうして智久と過ごそうか。とりあえず、何か話してくれないかなと思いつながら、智久の顔を凝視してみた。

黒ぶちの眼鏡は伊達ではなさそうだ。一見地味に見える智久だが、眼鏡にかからないようにだろう。短く切られた前髪と、耳にかかる程度に短髪の黒髪は、清潔感が出てとても似合っている。眼鏡の奥の双眸は綺麗な二重で、虹彩まで真っ黒だ。たれ目で、睫毛が

長い。鼻筋も通っているし、普通にかっこいいと、朱李は思った。

「……………なんだ？」

「えっ？」

初めて智久から掛けられた言葉に、朱李は素っ頓狂な声を返した。突然、なんだと言われても答えに困る。

「なん、何が？」

「ジツと俺を見てただろ」

ああ、そういえば。右から三対七の割合で分けられた旋毛から、スツと流れる顎まで、朱李は智久の顔を観察しきっていた。

「智くん、見られるの嫌い？」

「智くん！？」

朱李がつい遊斗の呼び方を真似てしまうと、智久は眉を潜めた。初対面で馴れ馴れしすぎたかと朱李は不安げになるが、それは怒りとはまた違った反応に見える。

逸らした目には明らかな戸惑いが浮かんでいた。心なしか、耳が赤くなったようだ。

「……………照れてる？」

「照れてねえよ！」

そう言っただけの顔は、照れているのだと主張しているようなものだった。今度は間違いない、顔中真っ赤だ。

恥ずかしさを紛らわせたいのか、智久はそれから朱李を睨むように見続けた。

「お前……………。遊斗に何望んでんだよ」

「え」

「なんか考えがあって同居するなんて言い出したんだろ？ 言っとくけど、遊斗はお前みたいな見た目も中身も軽い女、なんとも思っていないからな」

途端に朱李の表情は曇った。ほれ見たことかと、智久は目を細める。

「あたし、太りたくても、太れないんだもん」

体が細い事は、周りから見れば羨ましい事なのかもしれない。だけど朱李としては、これは一番重要なコンプレックスだった。

本気で傷ついたというのに、智久は呆気にとられたように瞬きを繰り返している。そんな彼を、朱李は恨めしげに見た。

「……バカじゃねえの」

「本気で悩んでるんだよ！」

「じゃなくて」

呆れたように制止する。異性同士の同居を認める女なんて、どうせろくでもない奴に決まっている。そう思って押しかけてきたのに、なんだか智久は気が抜けていた。

「お前のそういうの、計算？」

「……なんか、智久んの言葉っていちいち難しい」

そこまで話して、智久は頷いた。計算じゃない。コイツは天性のバカだ。

「智くん？」

「遊斗のこと、好きなのか？」

智久の言葉が、朱李にはすぐに理解できなかった。いくら日本で生まれ育った根っからの日本人でも、やっぱり日本語は難しい。

好きって、どの好き？

聞いたところでまたバカと言われそうだったし、それは何だか嫌だった。朱李は必死に考えて答えを出した。

「人としてなら、好きだよ」

「それ以上はないのか？」

「あたし、ゆーとは恋愛できないと思う」

遊斗と初めて会ったとき、いや、会う前から、朱李は彼に特別なものを感じていた。しかしそれは、いつか恋愛に転ずるものではない気がする。むしろ、一生変わらない情。家族愛でもなく、友愛でもなく、まして恋愛なんかじゃない。名前の付けようのない気持ちだった。

「しいて言うなら、双子みたい」

「お前年下だろが」

呆れたように言いながら、智久は笑った。

彼はたれ目だから、笑った時はすごく優しくそうになる。

仲良くなれそうでよかったと、今度は素直にそう思った。

それから十分ほどして、遊斗と結架が帰宅した。結架の表情にも、行く前の刺々しい感じがなくなっていて、朱李は首をかしげる。

「じゃあ、さっさと作るから待ってて」

「あ、あたし手伝うよ」

朱李と遊斗がキッチンに立つと、結架と智久はテレビを見ていた。結架も智久も、あまり初対面の人間と馴染むタイプではないので、会話は弾まないのだろう。

朱李たちの住む家はダイニングキッチンで、広さは十畳だが、間にカウンターと冷蔵庫が置かれているため、キッチンの会話は声量によってダイニング側には届かない。

「え、ゆーとも結架ちゃんに言われたの？」

「もって、朱李も？」

「うん、智くに。ゆーとはあたしになんか興味ないぞーって」

ぷつと遊斗が吹き出した。ジャガイモを切っていた手が止まっている。

「なんか、まるで恋のライバルのセリフだな」

「あたしと智くんが？」

「うん」

うんって。朱李はあからさまに嫌そうな顔をしてやった。

「あたしは智くんのライバルにもならないよ」

「はあ？」

「あたしはゆーとを好きになんかならないもん。だから喜んで智くんに譲ってあげちゃう」

厭味なくらい無邪気な笑顔を向けてやる。それをはつきり厭味だと受け取ったのか、遊斗は横目でちらりと朱李を見遣った後に、再び野菜を切り出した。

「俺は智にモテても嬉しくないけどねえ」

「あたしにモテたら嬉しいって?」

「智にモテるよりはね」

同性に好かれて喜ぶ人を見るほうもごめんだなと思えば、朱李は剥いた野菜の皮を三角コーナーに捨てた。次は材料を炒めようと鍋に火を当てる。

「ゆーとはあたしを好きになる要素ある?」

「なんだそれ」

そう言っただけで笑う遊斗は、多分朱李の言葉をまともに受け取ってくれているに違いないだろう。鍋が煙をあげれば、油をひいて鶏肉を入れた。「あたしは多分、一緒に住もうが何しようが、漫画やドラマみたいにゆーとを好きにはならないと思うから……って、何このしゃげ?」肉のパックの下に積み重なっていた鮭の切り身に、朱李は目を丸くした。

「それも、カレーに入れようぜ?」

「ゆーと一緒にごはんすると、絶対しゃげがある気がする」

何を隠そう、遊斗は無類の鮭好きだ。遊斗に調理を任せたら、最悪全ての料理に鮭が使われる。他の魚介類は一切食べないくせに、なぜか鮭が大好きなのだ。

「そんなことねえよ。ほら、人参入れないから代わりに鮭な」

そう言われると、朱李は有無を言えなくなった。朱李は人参が嫌いだ。本来魚介類も好きではないのだが、生でなければ食べられないこともない。

人参か鮭か。どちらかを取れと言われれば、朱李は迷わず鮭を取った。

「でも、そうだな。俺も朱李は、恋愛対象とかそんなんとはまた違う気がする」

切った野菜を加えながら、遊斗はタイミングを見計らったようにそう言ってきた。自己中から出来ていると言っても過言ではない遊斗が、こういう態度を見せるのは珍しい。

いつもこうなら、自分と遊斗の関係も変わっていたのかもしれない。と時々朱李は思っていた。

「友達かな」

「それもまた然り」

「？」

「あながち間違いじゃないってこと」

「他にある？」

「うーん……。兄妹とか」

「じゃあやっぱり双子だ」

「何だそれ。俺年上だし」

智くんと同じこと言った。などと思えば、朱李はクスクスと笑い出した。怪訝そうに眉を潜めた遊斗が、コップに水を汲んで鍋に入れる。

「ゆーとそれ量ってる？」

「いや、勘」

やっぱり頼りにならないなあ、と、朱李は溜息をつくことしかできなかった。

\*

カレーが完成すると同時にご飯も炊けた。お腹を空かせて待つているだろう結架と智久へ、盛り付けたカレーを運んでやる。テレビが丁度、七時を伝えた。

「なんでこのカレー、しゃけ入ってるの？」

そう呟いたのが運の尽きで、結架はその後延々と、遊斗に鮭の素晴らしさを語られる事となった。

「手伝おうか？」

後片付けをしている朱李の元に、智久が顔を出した。振り返るなり笑顔をつくる。

「ありがとう！ ゆーと何してる？」

「山元……だっけ？ そいつとまだ喋ってる」

「しゃげについて語ってるの？ いい迷惑だね」

「お前さあ……」

朱李の隣に立つなり、智久は口を開いた。

なかなか紡がれない言葉の続きに、朱李はきよとんと首を傾げる。

「お前、遠慮とかしないんだな」

「へ」

「遊斗と住むようになって、まだ二週間だろ。普通そこまでずばつと言えないんじゃないの？」

何も言わないでも、洗い終えた皿を布巾で拭いてくれている。さすが几帳面な智久だ。遊斗とは大違いだと、朱李は心の隅で思っていた。

「ゆーとだからだよ。元々思ったままに言う方ではあるけど、ゆーとはなんか……何を言ってもいいのか、言っちゃいけないのか、表情見なくても分かるから」

そう言って微笑む朱李を横目で見ながら、智久はそれ以上何も言わなかった。

\*\*\*

遊斗との共同生活を始めて、もうすぐ一ヶ月だという日曜日だった。だいぶ午前中から気候が暖かくなり、蒲団からも出安くなってきた。

今日は十時からアルバイトが入っている。簡単に食事を済ませようと部屋から出ると、そこに遊斗の姿があった。

「……あれ？ ゆーとどっか行くの？」

自分の姿がパジャマ代わりにスウェットだろうと、髪がぼさぼさだろうと、果てにはスッピンだろうと気にしない。ちなみに遊斗は、着替えも既に済ませており、髪もバッチリセットされていた。

意味深に、ニヤリと笑う。

「デート」

「ふうん、デ……デート!？」

デートとは、仲むつまじい男女が二人きりで行くものだ。遊斗にそんな女がいるなんて、朱李は聞いたことがない。

「彼女できたの!？」

眠り眼だった彼女は何処へやら。今はすっかり遊斗の彼女の存在に瞳を輝かせていた。

「できたって言うか、元鞘に戻ったんだな」

「……て、この家で同棲するはずだった彼女？」

「そうそう」

数回瞬きをして、朱李は俯くなり考え込んだ。それって、もしかしてまたこの家で同棲とかいう話になっていくんじゃない? ……。

「あたし、他に住めるマンション探しといたほうがいい？」

「あ? いい、いいってそんなん。別にもう一緒に住むとか考えてないし。一からやり直しなわけだしな」

「うーん、でもさ、自己中の塊のゆーとがそんなに好きになれる彼女って、ちょっとすごいよね」

カウンターへ向かうと食パンを一枚出した。隣のトースターに入れて、三分計る。

「はあ? 俺そんな自己中じゃないし」

「ゆーとが思ってるよりは自己中だし」

「はーん。そういうこと言うんだ。もう朱李には彼女のプリクラ見してやんない」

「あるの??」

「関係ないだろ」

不機嫌オーラ丸出しの遊斗に、朱李は近づいた。自己中は否定しないけれど、一途なところは遊斗のいいところだろう。

ただ今は彼女の顔がどうしても見たくて、朱李は嘘も本音も思うままに紡いでいった。

「ゆーとは自己中なんかじゃないよ！ すつつごく優しいし、あたしのこと考えてくれてるし。あたしもう、ゆーとに惚れちゃいそうだもん！ そんなゆーとが好きになる女の子ってどんな子なのか、見てみたいなあ」

たかが彼女のプリクラを見せるか見せないかで、そこまで一生懸命になる朱李がおかしくて、遊斗は笑いを堪えるのに必死だった。

「ね、ね！ お願い」

腕に絡み付いてねだってくる朱李にも、遊斗は含んだように口角を上げ、眼を細める。それは彼氏が彼女を見るような瞳であり、親が子を見るような瞳でもあった。

「はいはい。ほら」

携帯電話の電池パックの蓋を開けると、それを朱李に渡した。裏を向ければ、二人の女の姿がある。遊斗の腕に絡み付いたまま、朱李は少し口を尖らせた。

「ゆーととのじゃないんだね」

「ああ、だって俺写真嫌いだもん」

「え、何で？」

「ポーズ考えたりとったりすんのが面倒くさい」

朱李は言葉を失った。なんと遊斗らしい言葉だろう。やっぱり遊斗は自己中だと思つと、朱李は再び写真に見入った。

「あ、ちなみに俺の彼女は」

「この子でしょ」

朱李がショートカットの女性を指差すと、遊斗は目を丸くした。

「なんでわかんのか？」

「だってめっちゃくちゃかわいいもん」

その女性が遊斗の彼女だと思つたというよりは、自分だつたらこの女性を彼女にするだろうという人を指差しただけだった。

別に隣に映っている女性がぶさいくなわけではないが、まん丸な小顔と眼に、プリクラ機の美白効果だけはないだろう透き通るような白い肌。ライトに反射し光る髪は、明らかにそこらのアイドルよ

りかわいかった。

朱李の言葉に満足したのか、遊斗は笑った。だけどでれっとしたその笑顔は、美形台無しだ。

「だろ？ しずりって言うんだけどさ。マジかわいいんだよ。そのうち朱李にも紹介するから　つと、もう行かなきゃ」

するりと朱李の腕から自分の腕をすり抜くと、遊斗は軽そうに立ち上がった。立ち上がり際に香水のかおりがする。これはいつも遊斗がつけているのと同じものだが、今日は若干つけすぎなようだ。「うん、行ってらっしゃい」

遊斗とのやり取りの間に焼きあがった食パンを取りにカウンターに向かいながら、朱李は彼を見送った。

食パンを取り出せば、そこにマーガリンを塗りたくる。時計が指す時刻は八時十二分。食べて着替えて化粧して……と、指折り数えながら、朱李は食パンにかぶりついた。

\*\*\*

朱李のアルバイト先は、歩いて十五分の喫茶店だ。簡素なつくりのその店は、都立大が近い為か学生の出入りが多い。

家から近い事と、かわいく動きやすそうな制服から、朱李はバイト先を選んだ。比較的ヒラヒラした服を好むのだが、アルバイトの制服はやはり動きやすいに限る。

浅緑色のＴシャツに、媚茶色のカフェエプロン。裾をおって七部丈にはく亜麻色のズボンは、朱李のお気に入りだ。そんな制服で、彼女は今日も元気に働いていた。

「いらっしやいませー！」

お昼のラッシュを越して、ようやく休憩に入ろうかと思ったとき、店のドアが開かれた。そこから入って来た人物に、朱李は一瞬我が目を疑う。

「智くん！？」

智久と会うのは、これで数回目だ。初対面のあの時から、ちよくちよく家へ遊びに来るようになっていた。まああれは、恐らく遊斗が無理やり連れてきていたのだろう。

と、朱李の顔を見るなり智久は踵を返した。

「ちよつと」と腕にしがみついて引き止める。

「待つて待つて。なんで帰るの？ せつかく来たのに」

「お前のバイト先だつて知ってたら、来なかつたよ」

「それつてあたしに会いたくないみたい」

「会いたくねえよ」

「何で!？」

その言葉は素でシヨックだ。智久に嫌われるようなことをした気がしないからなおさら。

「……お前うるさいんだもん」

「静かにしてるから。せつかく来たんだから入っていきなよ。うちのコーヒーおいしいよ」

溜息ながらに、智久は促されるまま朱李についていった。どうせ仕事だ。そうそう自分に構ってなどいられないだろう、と甘い思考が頭にあつたからだ。

しかし、現実はその上手くはいかないもので。

「ご注文は？」

「……コーヒー」

まんまとカウンター席に座らされた智久に、朱李は付きっ切りで接待を開始した。保温されているだけのコーヒーは、もちろんすぐに出てくる。

「はい、どーぞ」

できるだけ朱李に目をやらないようにしながら、智久は本を開いた。受け取ったコーヒーにスティックの砂糖を一袋入れる。

「智くんでブラックな印象だったのに」

そんな感想にも返事をせず、視線は紙面に集中させた。無視されたと気づいたのか、朱李の体がピクリと反応する。

「無視はひどい」

「……」

「智くん」

「静かにしてんだろ」

智久にそう言われれば、朱李はグツと口を噤むしかなかった。だけれどせつかく目の前に知り合いがいるのに、話せないのは何だかもどかしい。

「あたしのこと、嫌い？」

「なんで俺がお前を好きとか嫌いにならなきゃなんねえんだよ」

「だって……」

正直、朱李はここまで他人に無関心に接されたことがなかった。

嫌いになる人間だって、朱李を意識しているから嫌いになるわけだし、こういう無な感情を露あらわにされるのは、悲しい。

「嫌いって言われた方が、あたしは嬉しい」

「は？」

「なんとも思ってもらえないより、嫌いになってもらえたほうが、あたしを見てくれてるってことだもん」

智久は思わず朱李に目を遣った。どうやらこいつは、ふざけているわけではないらしい。

「わかんねえよ。そんな、好きか嫌いかなんて……」

そう言って智久は目を背けた。その頬が赤く染まっている。これは智久の“好きな方”だという合図なのだと思えると、朱李は笑みが零れた。

「ねえ、何の本読んでるの？」

静かにしているという約束など疾うに頭から抜け落ちていた。タイトルを見せるように上げられた本の表紙に目を遣る。

「……設計全集？ 智くん設計士目指してるの？」

「家作るの、夢だから」

「へえ！ じゃああたしが家建てることになったら、智くん設計してくれる？」

それに答えるのが恥ずかしいのか、智久は口を開かなかった。

「でもさ、なんで美大なの？ 設計の専門学校行った方がいいんじゃない？」

遊斗と智久は、同じ美術大学の二年生だ。

「元々、夢とかなかったんだよ。俺も遊斗もただ絵とか描くの好きで、で、美大で色々勉強してるうちに、設計に興味持ったつつうか

……」

「そうなんだ。うん、がんばってね！」

そう言っただけで笑う朱李に、智久はまた顔をそむけた。自分の夢をこらして語ったのは初めてだった。それを素直に聞き入れてくれた事に僅かな戸惑いと、何とも言えない嬉しさを感じ、ごまかすようにコーヒーに口をつける。

「ゆーとも言えなさ。今日デート行ったんだよ、あいつ。いいご身分だよ〜」

「デート？ 彼女できたのか」

「ああなんか、ヨリ戻したんだって」

「は？ あの野本のまのって女と？」

「苗字は知らないけど、名前は……」

「しずり」

「そうそう、そんな名前！」

遊斗が幸せなのだ。これは喜ばしい事実のはずなのに、智久はなんだか不服気だった。きょとんと、朱李は首をかしげる。

「どうかした？」

「俺、あいつ嫌いなんだよ」

「あいつって、しずり、さん？ かわいい人だと思っただけ」

朱李の言葉に、智久はさらに顔をしかめる。ちっと、舌打ちが飛んできそう。

「顔なんか知るか。あいつは腹黒なんだよ。顔で男を選んでるんだ。遊斗と別れて清々してたのに、……遊斗は女見る目ないんだよ」

「……なんか、智くんて見た目と中身違うよね」

「あ？」

「もつと優しそうなのに。なんか、ゆーとと智くんは性格逆の方が違和感ないかも」

「なんで俺があんな自己中になんきやなんねえんだよ」

「やっぱり遊斗は自己中だと思われているのかと思うと、朱李はつい苦笑を零した。でもそんな遊斗となんだかんだで親友を続けている智久は、言葉とは裏腹に優しい人なのだろうとも思う。」

「……俺、正直お前もろくでもない女だと思ってた」  
「え」

そんな。

あからさまにショックが顔に出ていたのだろう。困ったように頭を抱えれば、智久は投げやりに言葉が続けた。

「最初だよ、遊斗に言われたばっかん時。男と同居するっていう女だ。遊斗は顔いいし、彼氏にでもできれば自慢にもなる。事実元力ノ……彼女がそういう奴だし、遊斗自身そういう女に引っかかりやすいからな。だからお前に対しても冷たくしてたし……でもお前は桁外れにバカだし。だから今は思ってねえよ」

正直バカの一言には傷ついたが、それ以上に朱李は何だか満たされた気持ちになった。

「それって、あたしをゆーとの同居人として認めてくれるってこと？」

「……」

「智くんて、実はすっごいゆーと思いなんだね」

「……しゃべんな」

照れる智久の言葉通りに口を閉じれば、ただ満足そうに朱李は微笑んだ。

外は大雨。天気予報では大雨洪水警報まで発令されていた。時刻は四時だというのに、外はすっかり暗い。

「ごめんね。こんな日にモデル頼んじやって。帰りは駅まで送るか」

メイク室に呼び出された朱李あかりは、入鹿いるかに考えたメイクが自分に似合うか試したいと頼まれていた。今日はアルバイトもないし、と快く了解したところだ。

「先輩って本当熱心なんです。今はまだ五月なのに。本番の九月まで、他の先輩は全然余裕じゃないですか」

「一年のとき、俺モデルは頼まれなかつたから客席で見てただけだよ。先輩達の作品みんなすぐくて。俺もこの一年で習った事、ここで全て生かしたいんだ」

鏡越しの入鹿は、朱李が思わず微笑んでしまうほど瞳を輝かせていた。やっぱりいいなあ、と思わずにはいられない。

「玖瀬くせさん、普段はどんな感じのメイクするの？」

「あたし、ファンデーション嫌いなんですよね。皮膚呼吸が出来てない気がして。だから目しか気合入れてやらないです」

「だから逆に、肌綺麗なのかもね」

「そうですか？ やった」

そう言って笑った朱李の頬に、入鹿が薄くファンデーションを塗った。「これで肌荒れちゃったらごめんね」なんて、「冗談交じりに言ってくる。」

でもそうして触れる入鹿の手は心地よくて、朱李は返事を忘れて目を閉じた。この人に任せれば大丈夫。なんて、根拠のないことを思ったりしている。

「入鹿！」

心地いい空気は、その一言に一気に絶たれた。第三者の声に目を

開けば、鏡に映る扉に一人の女性が立っている。

朱李が思うより早く、入鹿はその名前を口にした。

「しずり？ どうしてここに……。勝手に校内入っちゃいけないって言ったでしょ」

朱李から離れた入鹿の手は、今はその女性の腕に触れている。だけれどそんなことは、今の朱李にとって大した問題ではなかった。

入鹿がしずりと呼んだこの女性。彼女を見るのは初めてではない。いや、実物を見たのは初めてだが、その顔は見覚えがあった。

肩につくかつかないかのショートカットに、丸い眼と輪郭。透けるような白い肌。

ついこの間、遊斗あそびうの彼女だと見せてもらったプリクラの女性が、今朱李の目の前にいた。

「どうせもう放課後だし、外で待とうにもこの雨だもの。それでも今まで待ってたのよ」

「……ん、ごめん。九月にショーがあるから、その下準備、手伝ってもらってたんだ」

ふと振り返った入鹿が鏡に映った。朱李はまだ、鏡越しでしか彼らを見ることができない。

「玖瀬さん。モデルやってくれる子なんだ」

しずりの目が鏡に映る朱李に集中した。その視線は、明らかに自分を品定めている。

「ふーん。意外。入鹿があんな子選ぶなんて」

ぴくつと、朱李は肩を震わせた。いまの言葉は完全に侮蔑だ。確かに朱李は、しずりから見ればかわいくはないだろう。けれどふと、智久の言葉が脳裏を掠めた。

あいつは腹黒なんだよ。顔で男選んでんだ。

「しずり。言葉に気をつけて」

「あ、悪い意味じゃないって。ほら、入鹿って結構ストリート系好きじゃん？ だからてっきりモデルもそういう子かと思ってたのよ」

そうだろうか。朱李は自分の顔が不快感に歪むのを感じてとつさに下を向いた。正直、今すぐこの場を去りたい。

「ならいいけど。ごめんね、玖瀬さん」

「いえ」

「ねえ入鹿。まだ時間かかるの？ 早く帰ろう。外暗いし、あの子だつて早く帰してあげなきゃかわいそうだよ」

優しい言葉に聞こえるが、その裏に込められた邪心が、朱李には分かっていた。はやく入鹿と二人になりたくて、それには朱李が邪魔なのだ。

「分かった。片付けて行くから、下で待ってて。うち生徒少ないから、最悪ばれちゃうかもしれない」

「……はい」

半分渋々ではあったが、しずりは言われたとおり部屋から出て行った。室内が一気に静かになる。

「玖瀬さん？ ごめんね。あの子、悪い子じゃないんだけど……」

「先輩の……彼女なんですか？」

「うん。まあね」

だったら十分悪い子だ。つい口から出そうになったその言葉を、朱李はグツと飲み込んだ。彼女の悪口を言われて、いい気持ちのする人間なんていない。

「あの、あたし帰りますね。買物しなきゃいけないし、雨ひどくなりそうだし」

すくつと立ち上がった朱李は、なんとか笑顔を繕った。入鹿はすっかりその表情を信じたようで、ほっと息をついて頷く。

「送るよ。駅まででよければ」

「いいですよ。先輩は彼女さん送らないと。あんまり危なそうならあたしも友達呼びますし」

「……ごめんね」

そう言っただけで笑う入鹿が、朱李はかわいそうで仕方なかった。それと同時に、心に真つ黒い霧もやが立ち込めているような、そんな気分

も襲われた。

\*\*\*

はあ、と朱李は息をついた。家に帰ってから、もう何度目の溜息か分からない。

遊斗と入鹿。大好きな二人が、同じ女性と付き合っている。よりにもよって、どうして自分がこの事実を知ってしまったのだろうか、朱李は思わずにいられなかった。

買物してきた食品を冷蔵庫に入れる。時刻は五時三十分を回っていたが、遊斗が帰ってくるけはいはなかった。

今日はバイトなのだろうか。朱李たちはお互いのアルバイトの間まで把握していない。

たとえばアルバイトで、遊斗の帰りが遅い事に安心しているのかわくはないのかも分からない。ただひとつ分かるのは、自分がこうしてうじうじ悩んでいても仕方ないということだ。

恋愛事情は朱李には難しい問題だ。ここはもう、結架ゆかに相談しよう、と、朱李は冷蔵庫を閉めるなり携帯電話を手にとった。

リダイヤルから結架の番号を選ぶ。発信ボタンを押して、後は彼女が出てくれるのをひたすら待った。

しかし何十回コールが鳴っても結架は出ない。時計は五時四十分を指した。もう学校が終わっていてもいい時間のはずだ。と、目に付いたカレンダーにふと思い出す。

五月入ったらすぐ合宿

ああ、もう。諦めたように電話を切って、朱李は今まで以上に盛大に溜息をつく。

誰も傷つけたくはないけれど、事態が事態だ。朱李一人が抱えるには、それは大きすぎる問題だった。

とりあえず遊斗が帰ってくるのを待とうと思いい、夕飯の準備をしようとして立ち上がったとき。

バチンッ！

激しいショート音と共に、朱李は視界を失った。

\*\*\*

「おはようございませう」

適当に会う人と挨拶を交わしながら、遊斗は更衣室に入った。彼が働くのはカー用品ショップで、車の点検なども承っているその店の制服は、すっかりオイルのかおりに染まっていた。

そんなジャケットを羽織ったところで、匂いなどすっかり慣れている遊斗には、なんの困惑もない。困る事と言えば、アルバイトから帰るなり、「オイル臭いからさっさとお風呂入って！」と朱李にどやされる事くらいだ。

今日は六時入りになっている。まだタイムカードを押す時間まで十五分はあるな、と遊斗が休憩室で休もうとした時、急に携帯電話が鳴った。

まだマナーモードにしていなかった着信音に、遊斗は戸惑い、周りからは視線が集まる。ろくに表示も見ないで、彼は電話を取った。

「もしもし？」

『ゆー……ゆー、と？』

「あ、なんだ朱李」

こんな時になんだと、遊斗は肩を落としながら通話相手の名前を呼んだ。帰宅時間などの催促はしない二人が、電話で話すことはほとんどない。

「どうした？」

『ま、まだ、帰ってこない……の？』

「は。なんだそれ。いつもはそんな事聞かないじゃん」

『お願い……！早く帰ってきて！』

そこで漸く、遊斗は朱李の声が震えている事に気付いた。しかし気付いたところで、遊斗には何もしてやれない。

「無理だよ。俺今からバイトだもん」

『家、真つ暗なの。お願い!』

何度お願いされても、困るものは困るのだ。ふと窓の外の雨音を聞いて、遊斗は呆れたように言った。

「停電だろ? 台所のカウンターの下にたしか懐中電灯あったから、すぐに復旧するって。それでしので」

アルバイトの時間が近づいてきた。遊斗は少々焦り始める。

『分かんないよ。あたし駄目なの、暗いところ……。助けてよ……。』

そう言われて、朱李の事が心配じゃないと言えば嘘になる。ただ、今日のアルバイトを休めば、時給千円が四時間の千二百円が二時間。合計六千四百円がパーになるのだ。

学費も生活費も自分で稼がなくてはならない遊斗にとって、それを易々と逃すわけにはいかなかった。

「結架ちゃん来れねえの? てかもう点くだるうからもうちよい堪えらんない?」

『無理だよ』

電話越しで、遂に朱李は泣き出したようだった。面倒だという気持ちと心配だという気持ちから、遊斗は電話を切るに切れない。

無言で暫くいるうちに、長針は五十五分を指していた。早く行かないと遅刻になってしまう。

「ごめん、朱李。俺行かないと」

『っ! っ! ……』

「早く帰るようにするからさ。ごめんな。マジごめん!」

そう言えば、遊斗は強引に電話を切った。携帯電話を見つめて罪悪感に胸を痛める。

朱李の事は大切だけど、遊斗はやっぱり、自分の生活をなんとか守らなければならない。今日ばかりは、自己中呼ばわりされても仕方ないなと思えた。

なんとか時間ギリギリにタイムカードを捺して、遊斗は店に出た。この雨のせい、店内の客はやはり少ない。

「お疲れ」

と、隣を通り過ぎた人物に、遊斗は思わず目を遣った。そうだ、こいつがいたと、無意識に頬の筋肉に力が入る。

「智！」

今しがた挨拶した遊斗に呼び止められると、智久ともしひは何の気なしに振り返った。

思考回路が働くより早く、遊斗に肩をガツチリと掴まれる。

「お前今上がりなんだよな？ この後予定は？」

「は？ ……ないけど」

怪訝そうに智久は答えた。何だというのだ。こっちは早く帰りたいのに。

「やあ、マジお前が同じバイト先でよかったあ。なあ、智、一生のお願い！」

そう言って手を合わせる遊斗を見たとき、本能的に智久は、彼と同じバイト先なことを後悔した。

\*\*\*

停電してから四十分ほど経ったが、未だに回復する様子はなかった。電気が切れたときのあの激しい音からして、何か大切な電線が一部ショートしてしまったのかもしれない。

しかし当の朱李には、そんなことを考えられる余裕もはやなかった。

膝を抱えて自分を守る事しかできない。もう何時間も、この暗い世界に閉じ込められている気分だ。

早く帰るって、いつ？ ねえゆーと、お願いだから早く帰ってきて！

ガチャ。ふと耳に届いた扉を開ける音に、朱李はとっさに反応した。ゆーとだ！ と本能的に思う。

「ゆーとっ！」

「うわっ!？」

縋るように抱きつくと、相手は驚いたように倒れこんだ。そんなことは気にも止めず、朱李はただぎゅっと彼にしがみつく。

ほのかに、油のかおりがした。アルバイト先でまたオイルに触ったのかと思っただが、いつものオイルと今日のかおりは、なんだか違うものだった。

それに今日は、香水の匂いがしない。いつも遊斗がつけている優しい香水のかおりが、今日は全くしなかった。

それだけ急いで帰ってきてくれたのだらうと、深く気に止める事はなかったが、それでも朱李は、なんだかこのかおりに安心感を覚えていた。いつも遊斗に感じるものとはまた違う安心感。なんでそんなことを思うのか、自分が不思議で仕方ない。

「ちよっ、おい、離れろ」

相変わらず腕の力が弱まらない朱李に、相手は困ったように声を発した。その声に朱李自身もハツとする。

それと同時に、部屋の明かりが復旧し、目の前の人物が、はつきりと視界に映った。

「と……智くん!？」

遊斗だと思っただけ抱きついた人物が智久とあれば、朱李は慌てて彼から離れた。今更に恥ずかしくて頬が火照ってくる。

「お前、相手が遊斗だからって安心して抱きついてんじゃねえよ」

それとは裏腹に、智久は怒りに染まった声を発した。しかし怒りだけにしては、何だか口調がたどたどしい。

「うあ、ごめん……。だって、怖かったし、ゆーと帰ってきたと思っただら、つい安心しちゃって」

「ついじゃねえ」

「ごめん」

その後も謝り続ける朱李に、智久は溜息をつく。済んだことは仕方ない。そう思うなり彼は立ち上がった。

「暗所恐怖症……なんだってな」

「ん。ごめんね」

「もういい。電気点いたんだし、もう大丈夫だろ。俺帰るから」  
くんと、智久の体が止まった。帰ると言った彼を引き止めるように、朱李はしっかりと智久の服の裾をつかんでいる。

「あの、相談が……」

「相談？」

智久なら、しずりの本性に気付いている。結果に相談できない今、朱李が頼れるのは彼しかなかった。

怪訝な顔をしつつも、ちゃんと座りなおしてくれる智久を優しいなと思しながら、朱李は今日あった事を全て彼に話した。

\*

話せる事はすべて話した。朱李が口を閉じると、今度は智久が怒ったように舌打ちをしてから口を開く。

「またかよ、あの女……」

「またつて？」

「前に遊斗と別れた時も、あいつ浮気してたのが俺にばれて、俺が言ったんだよ。ふざけんなって。そしたら次の日には遊斗のこと振ってやがった」

「何で……」

「振られんのが嫌いなんだよ、あいつ。付き合ってたんじゃないよ、付き合ってたよ。でも思ってたんじゃないよ？ だから俺がチクって遊斗に振られる前に振ったんだよ。けど俺、遊斗に何も言わなかったからな。それ知ってまた付き合うことにしたんだろ、どーせ」  
酷い、と朱李は思った。遊斗はあんなに彼女に対して一途なのに、そんな彼の気持を弄んでいるのだ。

「このこと、知ったらゆーと傷付くよね。……言ってもいいのかな」

智久は答えようとしなかった。どうしたらいいか分からなくて、朱李も黙って顔を俯ける。

「お前らしくなくね？」

フツと智久が呟いた。瞬きを繰り返しながらも、朱李は彼の顔を凝視する。

「遊斗に何を言ってもいいのか悪いのか、何となく分かるんじゃないのかよ」

「……今は、わかんない」

「そうじゃなくてもお前って無駄に正直じゃん」

「それってイヤミ？」

「だから！ 正直に動けよ。そうじゃなきゃ、お前じゃねえだろ」

そう言われれば、なぜか間違っていない気がして、朱李はうんと頷いた。もし自分が遊斗なら、恋人に浮気されているなんて冗談じゃない。だけど朱李のように思う人もいれば、浮気していてもいいから付き合いたいと思う人もいる。

しずりへの対応を、この二択から選ぶのは遊斗だ。だったら、言うこと自体は遊斗の邪魔にはならないのではないかと思えた。

「ありがと、智くん。あたしゆーとに言うね。隠しとおせる事じゃないし、どうするかはゆーとの決める事なんだから」

ふっきたように笑う朱李を見て、智久も肩の荷が降りたように体の力を抜いた。

遊斗の帰宅時間まではまだあるが、また停電が起きる事もないだろうし、もう大丈夫だろうと腰を上げる。

「じゃあ、俺帰るから。懐中電灯すぐ取れるとこにでも出しとけよ」  
「えっ。待つ……」

後を追うように立ち上がって、朱李は再び智久を引き止めた。今度はしっかりと腕を掴んで離さない様にする。

「今度は何だよ」

いい加減智久も痺れを切らしていた。早く帰って、学校の課題を片付けなければならぬのだ。

「あの……。ゆーと帰ってくるまで、一緒に居て？ あたし、一人でゆーとに話せるか不安だし……」

冗談じゃない。智久は思った。遊斗が帰ってくるのは確実に零時過ぎ。交通手段が車の智久が帰れないことはないが、課題は確実に間に合わない。

「無理だ。明日中に出さなきゃいけない課題もあるんだし」

「そ……か。ごめん……」

妙にしおらしい朱李に、智久は存外戸惑っていた。さっきの停電でまだ恐怖心が消え去っていないのかもしれない。

溜息をつく。こんな自分の性格が、今は憎たらしくて仕方なかった。だけど、コイツじゃなかったら……と僅かに思う、この感情はなんだろう。性格なんか関係なく、智久は朱李に未知の感情を抱きつつあった。

「ったく。明日課題出せなかったらお前のせいだからな」

投げやりな智久の言葉に朱李が顔を上げる頃には、彼はまた腰を降ろしてくれていた。

「いいの？ 課題間に合わないなら、あたし……」

「どうせ今お前振り切って帰ったって、気になって課題どころじゃないんだ。だったらここにいてやるよ。どーせ……乗りかかった船なんだし」

荒々しい言い方なのに、どうしてか智久の言葉は優しく感じられて、朱李は「ありがとう」と呟いた。

\*\*\*

「そっか……」

遊斗に全てを話し終えた頃には、すでに一時を回っていた。早く休みたいだろうに、付き合ってくれる智久や、話を聞いてくれる遊斗が救いで、朱李はなんとか言いたい事を全て伝える事ができたのだった。

「聞きたくない話だったなら、ごめんね。でもどうするにしろ、ゆーとにはちゃんと知っててほしかったの。ゆーとを裏切ってる人と、

利用されたまま付き合い続けるゆーとなんて、見たくなかったから  
「いいんだ。教えてくれてサンキュ。……なんつーかさあ、そんな  
ような気はしてたんだよね。前振られたときも、他に男いるっぽか  
ったし」

そう言っただけで笑った遊斗は、やっぱり辛そうだった。彼が恋愛に対  
しても自己中千万だったなら、朱李自身もどんなに楽だったかと思  
う。

「ゆーと……。これからどうするの?」

「朱李はどうしたい?」

「……それはあたしの決める事じゃないよ」

だな。と遊斗は頷いた。

「その先輩については、どうすんの?」

「たちばな橘先輩には、言っただけでいいのか迷ってる。幸せそうな先輩を見てた  
いのもあるし……。傷つけたくない」

入鹿は朱李の支えだ。彼が沈んでしまえば、朱李だって辛くなる。  
どうしたらいいのかと、遊斗は智久に目配せした。元々チャラチ  
ヤラとしたものが嫌いな彼らしく、別れてしまえと全身で語ってい  
る。

遊斗が別れば済む話といえはそれまでだ。でもしずりの浮気癖  
がそんなものでないことは、遊斗も本当は知っていた。いや、感づ  
いていたというほうが正しいか。

「なあ、朱李、だったら俺の好きなようにしてもいいかな」

「へ」

「もしそのタチバナやらイケバナやらい先輩が傷つく事になつた  
ら、そのときは朱李が慰めてやってよ。……てことで、頼みがある  
んだけど」

そう言っただけで笑う遊斗の笑顔に屈託がなくて、朱李は逆に嫌な予感  
がした。

## 結

遊斗ゆうとに言われたとおり、朱李あかりは学校が終わってすぐに駅前の公園へ向かった。

そこはブランコと滑り台があるだけの簡素な公園で、あまり人の出入りはない。電車が見えるという事で、時々小さな子供をつれた大人が散歩ついでに立ち寄るだけだ。

そんな公園のベンチに、彼女は座っていた。

砂ほど細かくはないが、砂利ほど大きくもない鉱物の撒かれた広場を横切つて近づくと、彼女　野本のもとしずりは顔を上げた。

しかしすぐに顔を下げたのは、目の前の人物が目的の相手ではなかったからだろう。それでも朱李がいつまでたつても自分の前から動かないとなると、さすがに怪訝そうに再び顔を上げる。

「何？」

「あたしのこと、覚えてないんですか？」

「は？　誰？」

「昨日　橘先輩たちばなのところであつた、玖瀬くせです」

まじまじと見つめられて、朱李もようやくしずりの顔をしっかりと見る事ができた。印象はプリクラとまるで変わらないが、雰囲気は思いのほかきつそうだ。実物は右目の下に泣きぼくろがある。

「ああ、入鹿いるかのモデルちゃん。なーに？　あたし人と約束してるんだけど」

「ゆーとなら来ませんよ」

朱李の口から遊斗の名前が出た事に、しずりは目を丸くしていた。段々話を読めたとしてもいうように、元の厭味な目つきに戻る。

「なんなのあんた。入鹿の後輩じゃなかったわけ？　なんで遊斗の名前知ってんのよ」

「あたしだつて出来るなら、どちらかとは面識もない他人でいたかったですよ。でも関わっちゃったんだからしょうがないじゃん。」

あたしはゆーとの同居人です。あなたと住むはずだったマンションの」

しずりは頷くと、面倒くさそうに立ち上がった。お手上げと言ったように両手を上げる。

「あっそ。それで遊斗に惚れちゃったとか、そういう類たぐい？ で、二股かけてるあたしには別れてとか言うんでしょ？ でも残念ね、遊斗そついうの一番嫌いよ？」

それは間違っていない言葉だ。もしこれが遊斗の言葉でなく朱李の勝手な行動なら、彼は間違いなく嫌がるだろう。

だけど、そこまで遊斗の性格を把握していてもおも浮気を繰り返しているのだと思うと、朱李はなおさら腹が立った。

遊斗の願いは、自分が来るまで彼女を引き止めておいてほしいということ。そして、

朱李がしずりに言っただけ、全部言っただけ。

「あんだ……最低……」

「は？」

「ゆーとの性格知ってて、橘先輩の優しいところ知ってて、二人と付き合うなんて最低！ ゆーとは本当にあなたのこと好きだったのに、振られても諦められないくらい好きだったのに！」

こんなに人に怒りを露にするのは、実に何年ぶりだろう。でもどうしたって、この怒りは収まってくれなかった。

「あなたとやり直せるってなって初めてのデートの時、ゆーとがどれだけ喜んでたか知ってるの？ あなたに振られてあたしと同居する事になったとき、ゆーとがどれだけ寂しかったか分かる！？」

しずりは眉を寄せた。面倒くさいと瞳が語っている。

「ゆーとを、橘先輩を傷つけるようなことしないでよ……！ あたしの大好きな人たちに酷い事しないでよ！」

「あのさあ、なんなのあんだ？ どの悲劇のヒロイン気取り？」

そついうのさあ、おもしろくないわよ。……分かったわよ。どっちが好きなの？ 一人譲ってあげるから」

その言葉に、朱李はただ目を瞠<sup>みは</sup>った。  
何にも分かってない。この人は、何にも分かってない！

「二人ともと別れてください」

「はあ？ 何あんだ。マジで何様？ 意味わかんないし、もう。勝手に言っただけ」

朱李に付き合うのに飽き飽きすれば、しずりはその場を去ろうと背を向けた。

自分の言葉じゃどうにもならない状況が悔しくて、朱李の目から涙が溢れる。

「待って、待ってよ！ あんたこそ何様なの！ もうやめてよ！

ゆーとも、橘先輩も……」

傷つけないでほしかった。しずりを紹介してくれた時の遊斗や、悪い子じゃないと言った時の入鹿の顔を思い出せば、どうかあの二人だけは、傷つけないで欲しかった。

そんな言葉を吐きつける前に、涙を拭うように大きな手が朱李の顔を覆う。

「しずり！」

その手の主は、大きな声でしずりを呼んだ。その声に、朱李自身も手の主が誰かを悟る。

「遊斗……」

そしてその名は心で思うよりも早く、しずりの口から呟かれた。

まるで朱李を守るように立った遊斗が、しずりには気に入らない。

「何よ。もしかしてその子のこと好きなの？」

「……うん。あんたよりは」

きっぱりと遊斗は言う。予想外の展開に、朱李は言葉を失った。

「いまの二人の会話、一部始終聞かしてもらったから。思ったより性格悪かったんだな、しずりって」

「！」

「ついでに、こいつ泣かさないでよ。ここまでキレてんのも初めて見たけど、こんなバカ正直でいい奴めったにいないんだからさ」

遊斗の手で視界が隠れているから、朱李にはしずりが今どんな顔をしているのか分からなかった。

「ただど声だけで考えれば、ここまで優位にたって話している遊斗に、相当怒っているのだろう。」

「なんなのよ！ マジ意味不明！ あんた達がラブラブしたいだけじゃない！ もういい、勝手にしなさいよ！」

「しずり」

再び踵を返そうとしたしずりを、遊斗はマイペースに呼び止めた。  
「何よ！？」

「もうあんたいらないから。俺と別れて」

その言葉にしずりは息をのんだ。きつと、こんな言葉をかけられたのは、今回が初めてなのだろう。なにも返す言葉が見つからないのか、逃げるようにそこから去っていった。

「よくがんばったな」

目を塞いでいた遊斗の手が、今は朱李の頭を撫でていた。優しい手にほつとすれば、人肌が恋しくなる。

そんな気持ちを察してくれたのかは分からないが、気付けば朱李の体はすっぽりと遊斗の腕に抱えられていた。

「ゆーと……ずっといたの？」

「大体な。最初朱李の学校行ってたから、時間ピッタリではなかったけど」

「学校？」

なぜ遊斗が朱李の学校に行くのだ。と、誰でも持つ疑問をもちろん朱李も持った。話が突拍子すぎる。

「話しに行ってたんだよ。例のしずりの彼氏と」

「はあ！？」

「そしたら向こうはそんなにしずりに執着なかったみたいで。あつちも多分別れる事になるんじゃないかねえの？」

あんぐりと口をあけたまま、朱李は瞬きも忘れて体を固めた。遊斗って人は……。

「ど、どこまで、自己中なの？ 普通行かないでしょ？ だってライバルなんだよ。遊斗が言ったって単なる告げ口じゃん」  
「まあ……いいんじゃない？ 丸く収まったんだし。これで全てが問題なし」

何が問題なしだ。相手が入鹿じゃなかったら、泥沼になっていたかもしれないというのに。

だけど遊斗のかわいい笑顔を見ていたら、なんだか朱李も、まあいいかと思えるのだから不思議だ。

「しかし、ありがとな朱李。俺のために怒鳴ってくれんの、カッコよかったぜ。やっぱり朱李大好きだ」

そう言っすぎてゅつと抱きしめてくれる遊斗につられて笑みを零せば、朱李もその背に腕を回して抱きついた。

「あたしも大好きだよ、ゆーと！」

\*\*\*

結架ゆかが合宿から帰ってきたのを機会に、朱李と遊斗は智久ともしさを含めた四人で遊びに行く事にした。まずは朱李たちの家に集まって、お昼ひるご飯を食べる。

「へえ。そんなことがあったんだ」

朱李はリビングで、結架にしずりと遊斗の話をしていて。遊斗が笑い話で話し始めた割には、昼食を作るとキッチンへ行ってしまうので、朱李が後を引き継ぐ事になったのだ。

「で、結局その先輩とも別れちゃったの？」

「そうみたい」

数日前に再び入鹿のモデルをしたときに、彼が苦笑混じりに話してくれた。もちろん入鹿は、朱李と遊斗が知り合いだということは知らない。

「ふーん。最低女ってやっぱりいるんだね。でもさ」

ぐいつと結架が朱李の腕を引く。小声で話し始めた結架に、手前

でテレビを見ていた智久は怪訝そうな顔をしていた。

そんなことにはお構いなしで、結架は興奮したようにそつと耳打ちしてくる。

「遊斗くんが一途なんだね。それに優しい。言っただけで、前に二人で買物行つた時もさ、朱李のこと傷つけないって約束してくれたんだよ」

「え」

朱李は感嘆の声を上げた。しかしよくよく考えれば、その約束は前回の停電の際に、既に破られたのではないだろうか。

「うん……でも、基本ゆーとは自己中だからね？」

それを差し置いても、結架に話したしずりを振つた際の経緯は、実際よりも断然易しいものだ。朱李ならあんな遊斗を、いいかも、なんて絶対思わない。

「えー？ でもさ、本当に自己中人は一途なんかじゃないよ。あたし、実はあの時から遊斗くん狙っちゃおうかなと思ってたんだよね……」

最後の方は独り言とも取れたので、朱李はあえて答えなかった。正直遊斗はオススメできる相手ではないが、両思いになったなら、全霊で愛してくれないこともないだろう。

自分の彼女が寂しいときも、きつとバイトを優先するような奴なのだろうが。

遊斗が一途なのは気持ちだけで、行動に表れることはおそらくないのだ。

キッチンから、暖かいご飯の匂いが漏れてきた。それに知られて振り返ると、遊斗が炒飯を持って後ろに立っている。

「出来たよ」

そう言つて机に置かれた炒飯は湯気を立ててとてもおいしそうだった。遊斗の炒飯は絶品だ。もちろん、鮭入り。

「わーい！ いったただっきまーす」

自分の前に置かれた皿に、さつそく朱李は箸をつけた。出来立て

の熱さも気にならないくらい、やっぱり絶品。

「おいしい！」

先に感想を述べた結架に、朱李も賛同するようにコクコクと頷いた。智久は食べなれているのか、こんなもんと言った顔だ。

「だろ？ 俺は炒飯で店が開ける腕前だからな」

「遊斗くんて器用なんだね。いい旦那さんになりそう」

結架ちゃんったら。初対面のゆうとへの態度を忘れたんじゃないの？ そう思うくらい、結架は遊斗を絶賛していた。すでにアタックを開始しているようだ。

「その前に彼女募集中だけどね。そういえば朱李、例の先輩しずりと別れてよかったな」

「そうだね。あんまり落ち込んでる様子もないし、よかったよ」

「じゃなくて！ お前が」

きよとんと朱李は首を傾げた。遊斗が何のことを言っているのか、全く理解出来ない。そんな朱李の内心を悟れば、溜息について遊斗は再び口を開く。

「好きなんだろ。そいつのこと。これで気兼ねなくアプローチできるじゃん」

「え！？ 朱李ってその先輩のこと好きだったの？」

ふっと、智久は顔をしかめた。朱李が好きなのは何だかんだで遊斗だと思っていた彼にとっては、そんな事実はおもしろくない。

いや、ここで遊斗が好きだと言われても、おもしろくないような気もするが……。

「ちよ、ちよっと待って。……なんであたしが先輩を好きな事になつてんの？」

遊斗の言う“好き”の意味を理解すると、瞬きを繰り返しながら朱李は訊ねた。三人とも不思議そうに彼女を見ている。

「だって朱李、だからしずりの二股許せなかったんだろ」

「そりゃ、先輩のことも嫌だったけど。でもあたしは先輩が好きだからそうしたわけじゃなくて、っていや、好きだけだ。それは先輩

としてっつていうか……とにかく！」

朱李の中で、“好き”は多種類あった。人には理解してもらいづらい感情ももちろんある。例えば、遊斗への“好き”だって聞く人が聞けばそれは恋愛だというだろうし、またある人が聞けば親友愛だというだろう。

しかし朱李の中で、遊斗はそのどちらにも当てはまる事はない。それでも、朱李が遊斗に抱く“好き”は、決して曖昧なものではないのだ。

入鹿に対しても同じだった。彼への“好き”は恋愛ではなくそれに一番近い憧れだ。だって確かに、朱李は彼を恋人にしたいと思つた時期があつた。だけど今は、それよりも強い“好き”を抱く相手がいる。

「あたしが一番好きなのは、智くんだもん。だから先輩のことはそういうんじゃないよ」

「ぶっ!？」

必死に言う朱李の言葉を受け取れば、智久は口に含んでいた炒飯を無理に飲み込んだようでもせていた。いろんな意味で、顔が紅潮している。

「朱李……、お前智みたいのがタイプだったの？」

朱李と智久を順に見回しながら、遊斗が驚いたように聞いてきた。結架は心なしか楽しそうだ。

「タイプなんて知らないよ。でも、あたしは智くんが大好きなの！」

だって優しいし、まじめだし。前に停電した時だつてさ……」

「もういい、言うな！」

叫んだ智久は、勘弁してくれといたげだった。きっとこういう事態にはなれていないのだ。

朱李だつて、こんなことを口走つたのは初めてだ。それどころか、ここまで好きになつた相手すら、智久以外にいなかった。

「じゃあさ、今日はダブルデートみたいのでいいんじゃない？ ねえ遊斗くん。朱李と吉原さん二人きりにしてあげようよ」

「そうだな」

本当は結架が遊斗と二人きりになりたいからの提案だろうが、別に不自由もないなと思えば、朱李も「賛成ー！」と手を挙げた。

「おいっ！」

智久の制止は誰にも受け入れられず、朱李は食べた皿を片付け始める。結架は手伝うとキッチンへ同行し、遊斗は赤面の智久を楽しそうにからかっていた。

幸先不安だった上京生活は、今は希望に満ち溢れている。

きっかけは、何てことない掲示板の書き込み。それが朱李の、かけがない人たちとの出会いへと繋がった。

大好きな人たちと、夢と希望に囲まれて。

彼女達の青春は、まだ始まったばかり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1412d/>

---

ユース！

2010年10月8日12時38分発行